

## なぜ日本は「鯨を食べる国」なのか？

### 食の文化産業の観点から鯨肉の意味を問う

若松 文貴 氏

(京都大学 学術研究支援室 リサーチアドミニストレーター /  
アジア・アフリカ地域研究研究科 特任講師 兼任)

#### 日時

2021年10月8日(金) 17:00～18:30



#### 開催方法

ZOOMによる開催です。下記サイトより事前にお申し込みください。  
<https://forms.gle/MAvaUbAWruzXUiTF7> (10月8日15:00締め切り)

#### 要旨

1982年に国際捕鯨委員会が商業捕鯨のモラトリアムを採択し、日本は1987年以降「調査捕鯨」として30年近く鯨の捕獲と消費を継続してきた。しかし、現在の鯨肉の供給量は限られており、大多数の消費者にとって鯨肉はもはや一般的な食糧ではなく、専門の料理店や地方の土産屋で提供される高級食材へと変貌してきた。鯨肉の供給量は年間約3,000トンあまりで推移しており、これを1億2千万人という国民の数で割ると、1人当たりの年間消費量は33グラム程度(刺身にして3切れ程)に過ぎない。普段は鯨を食べることはほとんどないにも関わらず、日本の捕鯨に対する反捕鯨団体の抗議活動や激しい批判が報道されるときだけ反感を覚えるのはなぜか？

本発表では、上記の問いに対して、戦後に鯨肉が普及し、モラトリアム以降に希少化する変遷を追い、鯨肉が「伝統的な珍味」として商品的・象徴的価値を得てきた過程を検証する。とりわけ、本発表では「食の文化産業」(Bestor 2004)という観点から、戦後とモラトリアム後の各時代において、鯨肉が生産・流通・消費・宣伝されてきた過程に焦点を当てながら、日本の「伝統食」として想像されるようになった経緯を歴史的に追っていく。

(共催：科研費基盤研究B一般「アジアにおける公正で持続可能なフードシステム構築のための農と食の総合的研究」/ 京都大学融合チーム研究プログラム SPIRITS2021「環境・健康志向型ドメスティケーション研究拠点の構築」)